

『正法眼藏雜文』の「辦道話」と血脈

渡 部 正 英

はじめに

機会があつて、岩手県奥州市の正法寺に伝わる『正法眼藏雜文』を手にとってみる事ができた。それが影印本『正法眼藏雜文』（春秋社、二〇一〇）として刊行され、「辦道話」「洞谷開山瑩山和尚之法語」「叡山大和尚之夢記」さらには末文に「當寺二代和尚之葬記」が載っている。

衛藤即応は『正法眼藏序説』（岩波書店、一九五九）に、『正法眼藏』は行を基本としての提唱であり、宗教のない宗教を哲学したのではないと述べ、「辦道話」は『正法眼藏』の序説の立場であり、特に『正法眼藏雜文』の「辦道話」は草稿本として重要であるとしている。

禪宗、中でも曹洞宗は様々な信仰形態に対応している。その不思議で束縛されない、信仰を支えているものは何かと云う問いをし続けていた。豊川稲荷、道了尊、龍神様、秋葉さまといった鎮守を祀り多くの信者を集める祈禱寺、また葬式

仏教の死者供養を行う回向寺として、全国の曹洞宗寺院の大半は機能している。そのような寺院を観て歩くうちに気付いたことは、禪宗として衆生救済に取り組んでいる根拠はどこにあるのかということである。そうした時にこの草稿本である正法寺本の「辦道話」に出会ったのである。

一 「辦道話」と弘法救生の意味

道元は禪宗としての衆生救済をどの様に考えていたのか、「辦道話」に「終ニ大白峰ノ淨和尚ニ参ジテ、一生ノ大事此コニ終ヌ、其ヨリ後、大宋紹定ノ初、本郷ニ趣キシ、則チ弘法救生ヲオモイヒトセリ」と述べて、如淨に参じて一生の大事を得た道元は、日本に帰ってしなければならない事として「弘法救生」という言葉をしるしている。それが衆生救済にあたる具体的な提案であったと言える。

それは師の如淨から坐禪を基本とした悟りを習得して「大事」を得た以後に、そうした様々な問題を、法を以て対応

『正法眼藏雜文』の「辨道話」と血脈（渡部）

しなければならぬと理解したと考えられる。その法が妙法であり、正法である。その法は単に戒律を守ると云うよりは、もっと大きな秩序を示したものであると言える。それが坐禅という修行の力で衆生救済を求めるものと考えられ、端坐参禅の修行を求める根拠となったのではないだろうか。

二 立教開宗におけるホトケ

「辨道話」が道元の立教開宗の書であることは衛藤即応をはじめ様々に、以前から述べられていることである。その「辨道話」の中に十九の問答がある。その間に最初に答える形で示したのが次の一節である。

ヲロカナル人疑テ、仏法ニヲホクノ門アリ、何ヲ以テカ偏ヘニ坐禅ヲ勸ムルヤ、

示曰ク、是仏法ノ正門ナルヲ以テナリ、

問曰、何ヲ以テカ独リ正門トスル、

示曰、大師釈尊、マサシク得道ノ妙術ヲ正伝シ、七仏共ニ伝ハツテ、坐禅ヨリ得道セリ、此ノ故ニ正門ナル事、相イ伝ヘ知ルナリ、シカノミニアラス、西天東地ノ諸祖、ミナ坐禅ヨリ得道セルナリ、故ニ正門ヲ人天ニ勸ムルナリ、

このように釈尊が得道の妙術を正しく伝えたこと、過去七仏と呼ばれる七仏の教えも伝わって、坐禅により得道することが、正門とする事こそが基本であるとの開宗の宣言である。その得道の妙術がなぜ重要かを説明したのが「辨道話」

の最初にある次の文章である。

諸仏如来、共ニ妙法ヲ単伝シテ、阿耨菩提ノ証スルニ、最上無為ノ妙術アリ、是但ダ、仏ホトケニ授ケ枉マナル事無ハ、自受用三昧其標準ナリ、此三昧ニ遊戲スルニ、端坐参禅ヲ直道トセリ（草稿本）

道元の示した「諸仏如来」は、諸仏はやがて悟りを得て如来となるから、諸仏は共に妙法を単伝して、阿耨菩提の証明をする事により、最上無為の妙術を得道するとされる。妙法を単伝することは阿耨菩提の悟りを証するための必要条件であり、その上で最上無為の妙術を得道することが要求される。その妙術は仏がホトケに授けるためのものであるという。妙法を単伝して阿耨菩提の証をしているので、よこしまなことはない自受用三昧であることが標準となると、それ以外の方法を厳しく戒め、この三昧は端坐参禅を以て得ることができるとしている。

ここで重要なのはホトケの存在である。流布本では次のようになる。

諸仏如来、ともに妙法を単伝して、阿耨菩提の証するに、最上無為の妙術あり。これただ、ほとけ仏にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧、その標準なり。（流布本）

「ほとけ仏にさづけて」と「ほとけ」と「仏」の位置が逆転している。此の事は何を意味しているのか。多くの解説で

は仏が仏に授けるものとしている。しかし、それでは単伝することゝ更に説明しただけとなるのではないだろうか。もつと別の意味を考える必要を感じた。そこに出てきたのが『正法眼蔵雜文』の草稿本である。「仏ホトケニ授ケ」と仏がホトケに授けるとしている。ただ仏が仏に授けるだけの意味ではないように思えた。

ホトケの意味を探ると、日本古来のことばとしてあったことを知る。(民俗学者)有賀喜左衛門の「ホトケという言葉について」⁽¹⁾の中で、ホトケは古代から使用され、その意味は整理すると二つの意味になると説明している。一つは仏教伝来により「如来」の意味として考えられ、もう一つは「死者」を意味する言葉という。ほとけ仏では確かに仏が仏にと理解できる。仏ホトケでは仏が死者に授けるとなるのではないか。道元は「ホトケ」の意味を知っていて使い分けをしたのではないかと考える。そうすると開宗に必要な条件としてあった弘法救生の意味が衆生済度に広がっていたと考えられる。妙法を以て妙術を得道するのは、最終的に衆生救済の目的として死者に授けるものであると考えていたからであろう。

日本では仏教渡来以前から、死者には死穢や死霊の祟りがあると考えられ、それを取り除く儀礼が様々行われてきた。そこに仏教が伝来して、死穢や死霊の祟りを克服する事が可能であるとの考えが広まり、その立場を得て浸透していった。

『正法眼蔵雜文』の「辦道話」と血脈(渡部)

平安期までの仏教は氏寺をもつような一部人々のためのものでしかなかったが、ようやく衆生救済ということが広く言われるようになったのは鎌倉期になってからである。その事は同じ時代に浄土教の源信や法然などが念仏を死者供養のために広めた事などを考えると時代に合っていた事といえる。道元はそうした衆生の要求を考えていたのではないかと思われる。ホトケに授けるものとして、今日的には授戒得度の作法と血脈授与が考えられるが、道元の時代に衆生済度のためにホトケに授けることが具体的な問題としてどれほど整っていたかは不明である。そうした具体的な死者供養を積極的に行うようになったのはもう少し後で瑩山以後の事である。僧侶が死者に引導を渡し血脈を授与する葬式が定着して葬式仏教と呼ばれるまでになっていくのである。

三 初めて禅の教えを日本に伝えた道昭等の事から

「仏ホトケ」に授けるを、もとにした衆生救済を実際に行うことは道元の時代でもそう容易いことではなかった。歴史の上で、禅宗の影響下にある衆生救済については奈良時代あたりまで遡ることができる。『続日本紀』⁽²⁾で禅の初伝とされる道昭(照)(六二九〜七〇〇)が、元興寺の東南隅に禅院を建て坐禅を専らにし、そこに行業の徒と呼ばれる修行者たちが禅を学んだと記されている。その中には大仏建立に貢献し

『正法眼藏雜文』の「辨道話」と血脈(渡部)

た行基(六六八―七四九)などがいたとされる。道昭は遣唐使船で中国に渡り、玄奘に法相宗を学んでいるが、玄奘は禅の行を学んで帰るように言う。道昭は玄奘から授かった鍋で粥を煮て病を養った記録や、「路傍穿井、諸津濟処、儲船造橋」というように井戸を掘り、川を渡る船や橋の設置するなど、さらに修行の行業の徒が社会事業などに貢献する様はまさに救済である。しかし個々の能力に任され、一定の秩序というものゝ欠いていた。道元はその辺の問題点を把握していたとみられる。その事について、「辨道話」では、

問曰、我朝ノ先代ニ教ヲ弘メシ諸師、共ニ是入唐伝法セシニ、何ゾ此ノ旨ヲサシヲキテ、只教ヲノミ伝シ、示曰、昔ノ人師、此法ヲ伝ヘサリシ事、昔ノ人ニ問フヘシ、我ハ今ノ人ナリ、

道昭等が入唐伝法しているのに妙法を以て妙術を行う坐禅を示さなかったのはどうしてかとの問いに、その時代の人師が法を弟子に伝えないのはそうした時代であつたからである。しかし、衆生救済を行い社会事業などに貢献している。今とやかく言うことではないし、今その時代に出来たことを評価すべきで、責めることはないとしている。又その道昭につづく上代の師の法のあり方についても問うている。

問曰、彼ノ上代ノ師、是ノ法ヲ得セリヤ、示曰、会セバ通ジテンと、上代の師は此の法を得ていないことを示している。此の上代の師とは行基をはじめとする坐禅を行う行業の徒と呼

ばれる修行者集団の行動をさしているだろう。集団を形成し社会貢献したが、此の法を保つことをしなかつたので禅宗という宗派にならなかつたことを暗にいい、このように妙法を単伝して妙術を行う弘法救生の実践はそんなに容易いものではない事をここでは言っている。

さらに流布本から削られ『正法眼藏雜文』の「辨道話」にだけ残された次の問答で弘法救生の難しさを述べている。

問曰、法華・真言・華嚴教等ハ其ノ教主勝レタリ、樹下ノ応身ニアラス、説ク所ノ法モ亦スクレタリ、今云所ハ釈尊迦葉ニ対セリ、是応身ノ仏ケ、声聞ニ蒙ラシムル処、先キノ大乘教ノ宗ニ及フヘキニアラス、如何。

示曰、一翳眼ニ有レハ空花乱レ墜ツ、委ク顧ルヘシ、況汝カ云処ノ顕密ノ大乘教ニ釈迦ノ外ニ教主アリト知レル、己レカ教主ヲモ未タ知サルナリ、此外ニ覓ハ捨父逃逝ノ初メナルヘシ、迦葉ハ偏ニ声聞ト思エル、村人愚ナルカ、王宮ノ臣位ノ排列ヲ定シカ如シ、仏法ノ大道ヲ錯ルノミニアラス、教家ノ旨ニモ暗シ、汝ハ外道カ、天魔カ、暫ク婦テ、己カ宗師ニ語レ、再ヒ来ラハ汝カ為ニ説ン、我レ法ヲ惜ムヘカラス。

なぜ削除されたのか。編集の趣旨に「仏ホトケに授ける」の意図が伝わっていなかったからであろう。

問に、道元がここに禅宗の開宗を宣言する以前からあつた宗派の法華・真言・華嚴教などでは、それぞれ教主が勝れていて、応身の仏ではない、その法も優れている。釈尊が迦葉に對しているのは応身の仏で、声聞とも云える、大乘教の宗

に及ばないのではと言っている。是は既成の教主論を想定した質問者の問いであるが、しかし、道元が言うのは、その様な教主論ではない。既成の事にこだわった眼には大事なものが見えないのでよくよく考え直せと論している。顕密の大乘教では釈迦の外に教主があると云う。己は教主を未だ知らない。それは「辨道話」の冒頭にあるように、諸仏が妙法を単伝し阿耨菩提を証し、それぞれ最上無為の妙術を得道する妙術をもって行うのは仏がホトケに授けるものを重く受け止めて行う事を受け継いでゆくことが大事であると言っている。釈尊でさえ得道の妙術を七仏より正伝して、それは坐禅により得道せりと示している。質問者がこだわって外にと求めているのは、建前に拘った意識と同じで、そういう事にこだわっているのは仏法の大道と食い違うことになり、ここでの教える趣旨にも程遠いことになる。

まとめ

「仏ホトケに授ける」と云って、死者供養の意味と云うけれども、その中身は様々でその後の道程は険しいものがある。授けると云うことが現実的に信仰の世界で理解されるまでには時間がかかったと考えられる。既成の考え方では通用しないと云う強い覚悟を感じると同時に、なかなか受け入れられないようすを感じる。此処においても「弘法救生」が道元の

衆生救済を目的とした提案である事を理解していなければ、此のことは理解できないものであったと言える。故に流布本で削除された事は時の熟さなかったためとはいえ残念である。しかし、ホトケに授けるといふ教えは、衆生救済される側ではしっかり理解され定着していったと考えていい。

道元のいう法を授ける、授戒し血脈を授与するということは、今日の祈禱寺では、鎮守となった稲荷、天狗、龍神等に対して、仏の法を授けて縁を結び民衆の祈願を受けているし、亦死者供養では授戒得度して血脈を授け引導を渡して、『正法眼蔵雜文』の「當寺二代和尚之葬記」が示した葬儀法が参考にされ実践している。このような宗教的実践の「弘法救生」による儀礼の原点は「辨道話」の「仏ホトケに授ける」にある。日本達磨宗より道元を頼った懷井の求めていたものはその法ではないだろうか。

- 1 有賀喜左衛門「ホトケという言葉について」(『一つの日本文化論』未来社、一九七六)。

- 2 『続日本紀』文武天皇四年三月己未。道昭(照)伝。

〈キーワード〉「辨道話」、ホトケ、道元、血脈、弘法救生

(駒澤大学非常勤講師)